

班会・しんぶんタイムが 仲間づくりの力に

岡支部
福早良

早良支部は全10班での毎月の班会としんぶんタイムを力に、10年間、大会時の会員数を200人ほどに維持しています。小組でもしんぶんタイムを7割にひろげたことが、会員の元氣と仲間づくりの力になっています。

世の中の見方が変わった

早良支部では毎月全10班が班会を開いて、話の宝庫を「保育所」などの話で聞かせる。高齡化が進み、開くことがたくさんある。中には、常任委員が複数で足運んでいます。話し合いの場は、新しいこと、地域を新しいことに知ることが多い。事務局長の倉光さん。歴史のある先輩会員の



しんぶんタイムで「仲間づくり」と相談

近況報告だけでも話は、員がフォローして、話聞きませんが、常任委し合つて書いて班会レジュメにもどつてすめ

ます。

現役で働ながら活動している常任委員の吉田さんは、政治の動きや見通しをきたものが新婦人で学ぶ中で見えてきたと話します。

班会も工夫して開催

「いつも同じ顔触れ。新しい参加者を増やしたい」と、班会の後に「憲法カフェ」を企画。この情勢に憲法が心な楽しいことをやっているよ」と新婦人を紹介して入会など、会員を増やしています。委員会のグループLINEには「増えなくても行動したら教えてね」とよびかけ、「ダメだった」の報告にも、「次の機会があります!」「お疲れ様♡」などのスタンプで励ましています。

小組でのタイムが魅力に

仲間づくりは、班会で必ず議題にします。星の原班ではダンベル体操とたごえ小組でしんぶんタイム。今の政治について思いを語り合っています。この間、班のチラシを見た人、団地に引越してきた人に管理人が「こ

す。

配と久しぶりの会員が参加するなど、班会への参加が増えました。次回へのお誘いもでき、「今度は美と平和カフェ」と話し合っています。となりのトトロ班は働いている人が多く、参加する人が固定化されていますが、みなさんで相談し、班会を夜の時間帯に変更することで、参加が増えました。原班は体操小組の会員にも参加してもらえたらと、小組の後に班会を設定。いつもの倍の7人での班会が実現しました。

母の歴史

北海道 久世公子さんのお話 (1)

今回から炭鉱の町・夕張に住み続け、周りの女性と手をつないで、「貧乏をなくしたい」「良い世の中に」と活動してきた久世公子さんのお話です。

私は1938(昭和13)年、神奈川県横須賀市公郷町に、7人姉弟の次女として生まれました。物心がつく頃には戦争が始まっていて、父親は海軍の御用商人のようなことをしていました。妹が2歳になる頃、市内の浦賀に引っ越しましたが、軍需工場や火薬庫などがあり、米軍による空襲もありました。「ここにいたら殺されてしまう」。



娘と最近の久世さん(右)

身の危険を感じた父は、仕事を变え、他所に移住する決断をしました。その頃、九州と北海道の炭鉱では人を募集していた、父は夕張に移住し、北海道炭鉱機械株式会社に入社することを決めました。私の小学校入学直前の1944年3月に、私たち一家5人と母の妹2人の総勢7人で夕張に移住しました。

4月、私は下末小学校に入学。戦争の真っ最中で物資は少なく、カバンは器用な父親が作ってくれました。私は革靴を履いて夕張にきたため、雪道は滑って、まともに歩くことができませんでした。

校長先生が「短靴よりはいい」と私に大人の長靴をくれました。翌年に弟が誕生。その後2年おきに妹や弟が生まれました。一番下の妹とは14歳違いです。

空襲を避けて夕張へ

つづく

主張

7月25日は、日本で女性差別撤廃条約が発効した日(1985年)です。新婦人も加入する女性差別撤廃条約実現アクションは、この日を「女性の権利デー」として、様々な行動にとりくむことを呼びかけています。

7月25日女性の権利デー 憲法と条約学び行動へ

今年3月、日本版「女性の休日」アクションが全国370カ所以上でおこなわれ、一人ひとりが日常のモヤモヤを語り、可視化するとりくみとなりました。国に女性差別撤廃条約選択議定書批准を求める意見書採択は450議会に。新婦人はジェンダー平等を求める5つの署名にとり

くみ、40万人分を提出し、世論を広げる力となっています。しかし日本では、ジェンダーギャップ指数が148カ国中118位(2025年)と遅れており、世界から取り残されています。男は、選択的夫婦別姓の願いに背を向け旧姓の通称使用法制化を主張、衆院比例定数削減をねらい、皇室典範を改定し男系男子のみに皇位継承権を与えるなど、ジェンダー平等の最大の妨害者です。2024年10月、国連女性差別撤廃委員会(CEDAW)は、日本政府に対し、選択的夫婦別姓の導入や女性差別撤廃条約選択議定書の早期批准、包括的差別禁止法制定などを勧告しました。憲法とともに女性差別撤廃条約やCEDAW勧告を学び、「女性の権利を国際基準に」と求めていきましよう。



車イスの親子も参加